

図書館たより

号数 第64号
発行日 昭和59年3月30日
編集行 島根県立図書館
松江市内中原町52
TEL (0852) 22-5725
印刷 渡部印刷株式会社

昭和59年度予算

—子ども読書会とコンピューター—

厳しい財政状況の中で59年度の予算が決まった。

県立図書館の予算も58年度に引き続いて極めて厳しい。その中でも、新規事業が2つ認められたので、まずはまずの成果と考えている。この新規事業は、ここ当分の間、継続して行うものである。

一つは、地域子ども読書会の育成である。54年度から全県下に親子読書活動（家庭における幼児への絵本の読み聞かせ）を提唱し、市町村の教育委員会と提携して、幼児に対する読書普及事業を実施してきた。57年度末に実態調査をしたところ、県下の幼稚園、保育所に通う幼児の全家庭のうち、80%が毎週少くとも1回絵本の読み聞かせをするまでに、普及し、定着してきていることが判った。

この読み聞かせで育った子ども達が小学校低学年に達してきているので、次の段階として、小学生を対象とする読書普及に力を注ぐこととした。町村の大字程度の規模で「子ども読書会」をつくって読書指導を行い、併せて、その地域に「子ども文庫」を設置して読書普及を図ることとした。この事業は59年度から63年度まで継続して行い、この期間内に15町村をモデル町村に指定し、地元教育委員会と県立図書館との共同事業という形で普及を図ることにしている。親子読書活動とは異なり、組織づくりから手懸けねばならないので中々むずかしい仕事で

あるが、子どもの両親や小学校の先生方の協力と親子読書で育った子ども達の本に対する関心とに、大きな期待をかけている。

第二は、県立図書館にコンピューターを導入することである。2年前の館報でもとり上げ、その後調査研究を続けてきたが、財政事情窮迫のため、当初の計画より若干遅れて、59年度から本格的な準備に入ることになった。まず、当館にある本と本に含まれている情報を逐次コンピューター用の磁気テープに蓄積していく、64年度からその情報をコンピューターで検索して、利用者や市町村の読書施設に提供する考えである。これによって当館の持っている図書や図書の情報を、目録カードを繰る手数をかけないで、短時間に100%活用することができる。

また、コンピューターには、県立図書館の情報だけでなく、国会図書館の持つ膨大な図書情報も蓄積して、最大限に利用できるようになる。そして、ゆくゆくは、他の公共図書館や大学の図書館とも連携して、これらの図書情報を活用させてもらう事が考えられる。

これらの新規事業以外については、不充分ながらも一通りの予算がついた。乏しい予算の中ではあるが、工夫してサービス内容を低下させることのないよう、59年度の事業をすすめて行くことにしている。

島根県立図書館長

林 眞二

子供読書モデル市町村事業

豪雨災害後の仮設住宅の生活の中で、すさびだした子供の心を少しでもやわらげようと思い、途絶えていた読み聞かせをはじめたことが、子供だけではなく、家族全員の心の支えとなりました、という美都町の実践をはじめ、子供の遊びの中に絵本が生きるとか、語彙が豊富になったとか、絵本をもとにお父さんの料理教室がはじまったとか、子供の遊びに親子読書ごっこが流行している等々、親子読書の実践により、子供の心の豊かな育ちを確かな手ごたえとしてつかまれた保育所・幼稚園の先生やお母さん方からの報告が多い。

そして、忙しくて子供とふれあう時間が少い現代であるからこそ、その少い時間を親子読書により、より密度の濃いふれあいにしていかなくてはならない。これから子育てがはじまる若いお母さんたちに私たちが教えてあげたい、という声とともに、親子読書で育った子供を次の段階へどう進ませたらよいのか？その指導をして欲しい、という要望が相次くようになってきた。

こうした基盤に立って、子供読書事業がはじまる。親子読書同様、県と市町村の共同事業のモデル市町村指定の形をとり、3ヶ年の一定期間を限った援助指導により、地域ぐるみの自立活動としての定着を図り、その波及効果によって、子供読書グループ育成の輪を広げていくものである。

59年度モデル指定町村は、東出雲町・大東町・吉田村・桜江町・邑智町の5町村である。

モデル市町村では

(1)地域における読書普及に関する諸活動の確立

- 読書普及推進協議会の設立
- 読書普及指導員の配置
- 子供読書グループの育成

(2)地域住民の身近かに図書のある環境づくりをめざす配本等に関する諸活動の確立

- 子供文庫の設置
- ボランティアの養成

を目標として、逐年単独で図書等の整備および事業の推進を図り、指定期間終了後において自立した諸活動が確立するよう努力するものである。

これに対し、県教育委員会（県立図書館）では、

(1)子供読書普及活動実施にあたっての指導・助言

- 子供読書担当指導員の養成・研修
 - 子供文庫運営・ボランティアの養成・研修
- ### (2)子供読書普及活動実施に必要とする図書の貸出
- 子供読書会用セット本の選定・貸出
 - 子供文庫用図書（1ヶ所50冊）の貸出

(3)その他必要とする指導・援助

を3ヶ年遅延方式で助成していくものである。

市町村では、その地域の実態によって、おおむね大字単位に、10～15名程度の3～5年生児童の子供読書グループを組織し、毎月1回以上の読書会を開催し、そこに子供文庫を設置していく。そこで子供たちは、学校で行われる教師の意図による一斉読書とは異り、学年の枠をはずした仲間の中で、友達の考えを知ったり、自分の考えを述べたりして自信を持つようになる。生活様式や考え方のちがう家庭での親子読書で育った子供たちが、自分の両親との対話だけでは知り得なかった世界に目をむけたり、新しい発想などが生まれて、ものの考え方方に幅や深みができるてくる。それはやがて人や社会のかかわりの中で自分を見つめ生き方を考える契機になるであろう。なぜならば、考える力はことばを深く味わえる力から生まれる。そして、このことは人間という集団が長い歴史をかけて創造したのであって、けっして個人が創りだしたのではないからである。

豊かなひとり読みをめざして、読み聞かせから仲間読みへ、耳からの読書から目からの読書へ、親子のふれあいから仲間とのふれあいへと、親子読書は子供読書へと発展していく。全県下に広がり定着してきた親子読書を足場に、全県下に子供読書の輪が広がり、それぞれの地域に子供文庫が開設されることも、そう遠くはないであろう。

島根町教育委員会

島根町が親子読書モデル指定を受けて、3年が経過し、この3月で終ります。

この3年間、親子読書の輪を広げるために、そして、モデル指定から1人立ちするために、という観点から、いろいろの施策を行ってきました。

まず、56年度に指定を受けるにあたり、活動拠点を保育所に求めて、保育所の管轄である町民生課へ協力を要請し、町内5つの保育所の全職員を対象に研修会を開き、親子読書の理解を得てから町全体事業としてスタートいたしました。その後、活動の状況を見守りながら、次の4つの施策を実施し、3年間継続実施してきました。

1. 絵本を揃えること……県立図書館からの借用分を基に保育所、母親の要望をとり入れながら絵本を揃えてきました。
2. 研修会を開催すること……理解を深め、活発化を図るために、導入・中間・まとめの研修会を毎年開催、特に導入研修では全員の出席を得るために、入園式のとき行っています。
3. アンケートの実施……毎年同じ設問で、移り変わる実態を把握し、集計結果は施策に反映しています。
4. 親子読書文集「おかあさんといっしょに」を刊行……お互いの情報交換として役立つことを願い、第1集、2集、3集を発行しました。

このように親子読書を推進してきましたが、この活動の総まとめとして、去る2月26日、親子読書推進大会を開きました。この大会では、次のような話がありました。「家庭で絵本をよく買うようになった。また買うときの絵本選びが変ってきた」「読み聞かせを、家族全員で行っている」「読み聞かせを保育所の研究テーマとしてとりあげている」「町の有線放送で絵本の読み聞かせをながしている」等々の報告がありました。このような様子は3年前にはありませんでしたが、県立図書館のご援助により、本町の親子読書も、ここまで根づいてきました。今後はさらに大きく育つよう努力する次第です。

石見町立図書館

石見町は昭和59年3月で3年間の親子読書推進モデル町の指定期間を終える。指定された年の4月は中央公民館にあった図書センターを条例設置による町立図書館とした年である。蔵書は6,400冊で辞典や基本図書が多く、児童図書は2,563冊であった。親子読書をすすめるにはまず児童図書の整備充実が

急がれた。当面県立図書館から1,300冊の貸し出しを受けて町内5ヶ所の保育所の協力で園児284名を対象に配本を始めた。

以来3ヶ年の振興計画にしたがって、一年次は県立図書館から担当職員や中央からの講師の派遣を受けて町内の保母・小学校の教諭図書館・公民館関係者を対象に研修会の開催をするとともに親子読書の推進組織体制をつくることにつとめた。さらに2年次には保護者を含めた研修を重ねるとともに児童図書の購入に力を入れた。この年日本生命財団から児童用図書の購入費として50万円の助成を受け、かなりの児童図書を購入することができた。そして図書館を52m²から169m²に増設し117m²の児童図書室はカーペット張りにした。そして3年目を終える現在、蔵書9,100冊、内児童用図書3,800冊、配本冊数1ヶ所平均300冊になり、当初計画を上回る成果をおさめることができた。

テレビづけ、本ばなれといわれる今日、私どもはこの運動の中から子どもたちがこんなに本好きであり、幼児から本に親しむことがこんなに大切なことであったのかと運動の中から実感として教えられた。

3年間の親子読書の実践を通して保護者も我々も貴重な勉強をさせていただいた。今後もこの運動をつづけていく上で我々は図書館が家庭のような雰囲気で親しまれ、絵本をながだちとして子どもたちの夢を育てる場になるよう努力したい。明るい図書室でボランティアのお母さん方による読み聞かせが行われている。そうした図書館になれば親子読書だけでなく一般的の読書ももっと活発になるのではないだろうかと考えている。

親子読書モデルを終わるにあたつて

親子読書体験記から

親子のふれあいを

隱岐郡西ノ島町浦郷421西ノ島町立

浦郷保育所長 藤田 澄枝

当園の親子読書の始まりは、55年度の公民館事業からでした。今年は4年目になり読書普及モデル町村にも指定され、県立図書館の御指導を受けています。当初は、深く考えもせず、ただ本が備えられたことのみで出発しました。「読書」という言葉にとらわれ過ぎ堅苦しくさえ感じたものでした。そこで今年度の、月1度の読書会で読み聞かせを中心に親子のふれあいを大切にし、楽しく遊びながら進めたいと計画しました。具体的目標として次の4点を掲げました。

1. 毎日15分の読み聞かせを続ける。
1. 親子の対話を大切に、出来る限り多くの言葉を交わす。
1. 遊びを大切に、心と体の発達を促し、社会性を身につける。
1. お年寄、青年との交流の機会を作り、視野を広め、思いやりのある子供に育てる。

最近では、完成品が多すぎます。手作りの味を知らない世代とも言われています。そこで、親子で楽しく物を作り上げることに挑戦しました。第1回はクッキー作りです。そして、お団子作り、笹まき作りをしました。親子で楽しく試食会を設けました。次は、周囲の山にある木々を利用して笛作りです。小刀やカッターを使いこなせなくて苦心しました。なかなか鳴らなくて困った人のきれいな音色が出た時の喜びの声も忘れられません。これだけでは遊んでばかりいるようです。親と子が全員集まって行う読書会として何かもっと良い方法はないものかと考えていました。そんな折、県立図書館で「親子で絵本を読む会」松江市青年センター児童図書室で「おはなしのじかん」という催し物を新聞でみつけました。早速確認し、出張を利用して拝聴させていただきました。それを参考に、月1回の行事の時、保育所の保母、公民館、保護者の方たちで交代に読み聞かせをすることにしました。又、ゲームを取り入れたり、いろいろ工夫しています。親子でペーパーサート

作りもしてみました。お話作りは宿題とし、各グループで相談して作り上げてもらう事にしました。「この年齢になって宿題なんて…」と苦情もいただきました。そうはいったものの出来るかどうか不安でした。ところが、お母さんも子供も堂々と発表してくれました。こうなるまでには、苦労もされたでしょうし、話し合いも随分なされたようです。それだからこそ出来上った時の喜びはひとしおだったと思います。折角の作品ですので、老人ホーム慰問に是非持つてゆこうと考えています。

毎日の読み聞かせの継続は、保護者の方にとっては、苦痛だったようです。しかし、保育所で読み聞かせをするようになってから、先生に読んでもらった本は、子供たちのお気に入りになり、争って借りるようです。そうなると、先生方も本選びに神経を使います。子どもたちが借りて帰れば、いやでもお母さんは、読んでやらなければなりません。まだ満足のゆくような状態ではありませんが、読みきかせが定着した家庭が出来たことはとてもうれしいことです。

親子読書を始めて、子供が本好きになった事はもちろんの事ですが、保護者の方が子とのつながりを大切に思ってくれるようになったことも大きな成果でした。又、保母も勉強する場が出来た事も良い事でした。お母さん方も本を読まれるようになってきました。やはり、周囲の者が本に親しめば子供も本好きになる原因のひとつもあるようです。

月1回の親子読書会参加は、働く保護者にとっては、大変な事でしょう。「大変だ。忙しい。」といわれながらも参加して下さる事に感謝しています。軌道に乗るまでは、少々無理じいをする事もあるでしょうが、がんばって欲しいと思います。

親子読書の成果は、すぐに現われるものではなく、徐々に現われるものです。その時になって「良かった。」と言われるような、親子読書会にしたいと思っています。この保育所の親子読書会を巣立った保護者や園児の中から、読書会グループが結成され、もっともっと読書を中心とした輪が広がれば幸いです。

平田児童センター

夢ふくらむ、ぼくらの城“ひらた児童センター”は昭和52年11月6日、平田青年会議所創立10周年記念事業としてオープンしました。児童センターは平田市平田町の旧平田第一保育所建物の一部を改造し図書室といろいろな催し物ができるホールを作り、まわりに自由に遊べる子どものためのコミュニティー広場を設けました。初めは市民の協力、寄付により図書1,600冊余からスタートしました。現在は図書8,600冊までになっています。

昭和56年に、図書室に来ることが困難な遠隔地の人のために車に本をのせて各地を巡る移動文庫を始めました。はじめは本の貸し出しを行わず、3時間程度、駐車しその間に本を見つめらう方法をとりました。58年には小境町の集会所、西田地区の浄蓮寺、鰐渕公民館の3ヶ所を巡り、1人2冊までの貸し出しを行いました。1週間後にそれぞれの地区担当者の方にお世話になり、返却してもらう形にしました。現在、移動文庫と一緒に人形劇公演をしたり、59年2月から始めた折り紙教室を開いたりしています。

昭和57年11月12日に開館5周年記念として新装オープンしました。図書の冊数の増加にともない一部屋では狭くなり、古い建物を改装した部屋と図書室をアーチでつなぎました。子ども達がもっと楽しく入りやすいように、壁も夢のあるやさしい色調にし床にもじゅうたんを敷き、スリッパなしでくつろいで本を見る能够になりました。子ども達はこの部屋で自由に本を手にとり、思い思いの姿勢で本を読んだり、折り紙教室で習った折り紙を作ったりしています。新装開館以来、来館者が年々増え、青年会議所事務局員と兼務でやっている関係上



嬉しい悲鳴をあげているところです。

子ども会の育成ということで、市内小学校より5・6年生男女各1名ずつを選び出し、児童センター子ども会を組織しています。子ども会は毎月1回

活躍する児童図書館(4)

集まり、図書の整理、図書館見学、平田まつりのチビッコ広場への参加、清掃活動、クリスマス会など多彩な活動をしています。

しかし、児童センターを運営していくうえで、頭を悩ますのが図書購入資金捻出です。これが一番の課題になります。そのため「我楽多市」などの募金活動を行ったり、市民の皆様の協力により寄贈、寄付金を活用させてもらっていますが、なかなか思うにまかせない実情です。

でも、この平田児童センターにくる子ども達は、みんな本が大好きです。遊ぶことももちろん好きです。子ども達一人一人を見つめ、その子に合った本を与えていきたいと思います。本を立ちにして、毎日を楽しく過ごしたいと思います。子ども達もきっと心を開いてくれることでしょう。

天まで届け1、2、3ジャンプ！みなさんも、平田児童センターへ寄ってみませんか？



昭和59年度 県立図書館各種講座

事業名	出雲国風土記を読む会	古文書を読む会	
		入門講座	上級講座
開催日	毎月 第2金曜	毎月 第1土曜	毎月 第3土曜
時間	13:00~15:00	13:30~15:30	13:30~15:30
講師	県立図書館 主査 藤岡大拙	桜木保	県立図書館 主査 藤岡大拙
会場	島根県立図書館	島根県立図書館	島根県立図書館
募集人員	40名	40名	40名
対象	一般		
内容	わが国でただ一つの完本として、残っている「出雲国風土記」を講読しながら古代出雲の実相をは握し、郷土のもう深い歴史性を理解する講座です。	県立図書館が編集した「古文書ハンドブック」その他のテキストを使用します。 初歩から手ほどきし、読解力の養成につとめる講座です	入門講座を終えた程度の読解力をもつ人が対象になります。 テキストを使用して読解はもとより史料の背景をなす郷土の歴史に及ぶ講座です。

昭和58年度 受賞作品紹介

今年度もたくさんの本が出版されました。
なかに話題をよんだ受賞作品があります。
一度、読んでみませんか！

1. 芥川賞（第88回）

故芥川龍之介の名を記念し、文芸春秋社が「文芸春秋」昭和10年1月号に「芥川・直木賞宣言」を発表して、直木賞と一緒に創設。無名もしくは新進作家の登龍門として、最も権威ある賞であるとされている。

○夢の壁 加藤幸子 新潮社
○佐川君からの手紙 唐十郎 河出書房新社

2. 川端康成文学賞（第10回）

故川端康成を記念して、川端康成記念会が昭和48年に創設した賞で、日本人として始めての、

ノーベル文学賞の賞金を基金とし、最も完成度の高い短編小説に与えられる。

○湾内の入江で 島尾敏雄
○黙市 津島佑子 新潮社

3. 女流文学賞（第22回）

女流文学の振興と発展のため、従来からある「女流文学者賞」を吸収して、昭和36年に創設された賞で、女流作家の作品中もっともすぐれたものに与えられる。

○上海 林京子 中央公論社

4. 直木賞（第89回）

故直木三十五の名を記念して、芥川賞と同時に昭和10年に制定された賞で、無名もしくは新進作家の大衆文芸作品のうち、最も優秀なものに贈られる、芥川賞とともに一流作家への登龍門

受講者募集！

申込方法 「住所・氏名・電話番号・受講講座名」をハガキか電話で

〒690 松江市内中原町52 県立図書館管理課普及係まで TEL 0852-22-5730

万葉集を読む会	小泉八雲の作品とその周辺	親子で絵本を読む会	図書館読書教室
毎月 第2木曜	毎月 第3金曜	毎週 水曜日	毎月 第2火曜
14:00~16:00	14:00~16:00	15:00~16:00	13:00~15:00
島根大学名誉教授 小原幹雄	元京都外国语大学学長 梶谷泰之		
島根県立図書館	島根県立図書館	島根県立図書館	島根県立図書館
40名	40名	30名	30名
— 般 —			
現存最古の歌集「万葉集」の講読と鑑賞を行います。 原文の解説にとりくみつつ古代文化の精髓にふれる高度な講座です。 今年度は万葉集巻三からです。	松江の英語教師として赴任し、古い歴史・美しい自然・純朴な人情を愛し、日本に帰化した小泉八雲の作品や逸話等を通して、八雲の理解を一層深める講座です。	親と子を対象に絵本の読み聞かせ、ストーリーテリング、本の紹介等を行い、親と子の共通の楽しみを見い出すと共に読書への導入をはかります	読書に親しみながら人生に社会にあるいは文化に対する見方、考え方を養う目的からだれでも気軽に参加できる講座です 参加者はグループを作って、集団読書のかたちで和やかに意見の交流をはかります。

として最も権威ある賞とされている。

○黒パン俘虜記 胡桃沢耕史 文芸春秋

5. 吉川英治文学賞（第17回）

吉川英治国民文化振興会の設定する賞

○序の舞 宮尾登美子 朝日新聞社

6. 路傍の石文学賞（第5回）

山本有三記念会により、山本有三の功績をたたえ、昭和53年に創設された賞

○予守学校の女先生 苗生浩 ポプラ社

○窓ぎわのトットちゃん 黒柳徹子 講談社

7. 谷崎潤一郎賞（第19回）

中央公論社が昭和40年に創業80年を記念して「中央公論新人賞」を発展的に解消し、故谷崎潤一郎の業績をしのんで創設した賞

○樺(あさがお) 古井由吉 福武書店

9. 泉鏡花文学賞（第11回）

泉鏡花生誕100年を記念して、誕生の地金沢市

が昭和48年に創設した賞

○鬼どもの夜は深い 三枝和子 新潮社

○光る女 小檜山博 集英社

10. 大佛次郎賞（第10回）

朝日新聞に「天皇の世紀」を連載中に死亡した故大佛次郎氏の幅広い業績を記念し、昭和49年に創設した賞で、ジャンルのいかんを問わずすぐれた文学作品に授賞する。

○新しい人よ眼ざめよ 大江健三郎 講談社

○一色一生 志村ふくみ 求龍堂

11. 日本推理作家協会賞（第36回）

日本探偵作家クラブ創立とともに、昭和22年「日本探偵作家クラブ賞」が制定された。昭和38年クラブが日本推理作家協会と改組されたのを機に第16回から「日本推理作家協会賞」と改称された。

○天山を越えて 胡桃沢耕史 徳間書店

●昭和58年度図書館等読書施設職員研修会開催

3月15、16の両日、県立図書館において島根県公共図書館協議会主催の職員研修会が開催された。この研修会は、図書館や公民館図書室などの円滑な運営と住民サービスの向上、読書普及活動の推進のために、これらに勤務する職員が毎年集って開かれているものである。

今回も50名の参加者により、地域文庫活動や各図書館や公民館で行われている読書普及活動の事例について、それぞれユニークな発表があり、それについての熱心な研究討議がなされた。

また、研修会終了後、「公民館図書室における図書の整理」を希望者約20名が更に受講した。



●図書センター連絡会議、移動図書館連絡会議を開催

3月9日、図書センター、移動図書館の該当教育委員会の担当者が集まり今年度の読書普及活動の報告、来年度の活動について協議がなされた。

図書センターとは町村の読書施設を拡充し図書館設置を促進するため、県立図書館が指定し、協力して読書普及をすすめている町村読書施設である。現在9町村が図書センターとして活動している。59年度は三刀屋町、西郷町が図書館として誕生し、金城町、頓原町が新たにセンターとしてスタートする。

また、移動図書館は年間5回（隠岐は4回）12町村と4特殊学校を巡回している。

●昭和58年度図書館協議会開催

去る2月28日県立図書館集会室において協議会委員8名を迎え、昭和59年度の予算、事業計画について説明があった。後、質議応答がなされ、新規事業となる子ども読書普及事業の経済面について質問があった。親や青年層への読書普及等を市町村の社会教育指導員にしてもらったらという意見が出され、市町村読書普及奨励員を任命し読書指導をされたらという案が出された。

●親子読書活動関係者研究協議会開催

出雲部では2月6日平田市民文化センター、石見部では2月9日、江津商工会館で、それぞれ県読書推進運動協議会主催の「親子読書活動関係者研究協議会」が開催された。今年は例年ない大雪にもかかわらず県下各地で親子読書を推進していただいている市町村教委の担当者、幼稚園、小学校教諭、保育所の保母、PTA、ボランティアの方々200人余りの参加があった。日頃の実践活動の報告があり、今後の運動の普及発展について熱心な話し合いが行われた。



江津会場